

## スポーツマンガにおけるジェンダー秩序に関する考察 ——野球マンガにおける女性監督の分析より——

藤田 由美子

A Study of Gender Order in Japanese Sports Comics:  
An Interpretive Content Analysis of Images of Female Managers in Baseball Comics

Yumiko FUJITA

### Abstract

The purpose of this article is to examine the subversion and maintenance of gender order as portrayed in Japanese baseball comics through content analysis of the images of female managers. The content analysis in this study was based on the idea of “social constructionism,” in which researchers read and interpret the texts subjectively, rather than analyze the texts objectively. For this analysis, four baseball comics describing female managers of senior high school baseball teams were chosen, three of which were popular. The content analysis was conducted with interpretive reading of each comic, interpreting the representation of the female baseball manager from feminist’s and queer sociologist’s perspectives.

The findings were as follows: Firstly, female managers were represented as exceptions, especially in earlier published comics. Secondly, they were resistant to opposition from their players and other persons through demonstration of their power and skills. Thirdly, their femininity was a point of focus and some male characters looked upon them as sexual objects. These items are discussed in terms of Sedgwick’s ‘homosocial desire’ and Butler’s ‘subversion’ and maintenance of the gender order.

**Key words :** gender order, baseball comics, female high school baseball managers,  
interpretive content analysis, subversion and maintenance of the gender order

**キーワード :** ジェンダー秩序 野球マンガ 女性高校野球監督 解釈的分析 ジェンダー秩序の攪乱と維持  
2010.11.17 受理

### 問題設定

本稿は、野球マンガにおける女性の描かれ方を通して、——ここでは野球という特定の——スポーツマンガに描かれる世界における、「ジェンダー秩序」の攪乱および維持を、構築主義的視点より明らかにすることを目的とする。

子ども社会学におけるメディア研究は、新たな方向性を模索する時期に来ているといえよう。筆者は、「子どもとメディア」研究を概観し、「実証主義」を超えた

「構築主義」にもとづく研究を、今後の課題のひとつとして提示した（藤田，2009）。

構築主義の考え方は、メディアと読み手の関係ばかりではなく、内容分析にも導入することができるだろう。構築主義的な内容分析においては、メディア内容は「客観的」な分析対象ではない。分析者によって明らかにされるメディア内容自体、分析者自身の主観的解釈を通して「たちあがる」ものである。

本稿では、スポーツにおけるジェンダーの問題に一定

の知見を提供することを試みる。近年、スポーツ社会学の分野において、ジェンダーの視点からの研究が行われている。中には、メディアを分析素材とした研究も行われている。メディアにあらわれたスポーツをする女性をめぐる言説の分析は、スポーツする主体としての女性に対する社会のまなざしにおける「ジェンダー秩序」の存在を明らかにしている(飯田 2003, 谷口 2007)。

本稿では、分析・考察の対象を、女性が高校野球の「監督」となるマンガ作品に限定する。理由の第一は、日本の高校野球界においていまだ女子選手は認められない一方、女性指導者は認められ、実際にその事例がわずかならみられること(『朝日新聞』2008年3月22日付、西部本社版10版34面)である。第二の理由は、男性中心である野球のフィールドに女性が指導者として立つことをめぐるマンガ作品描写は、ジェンダー秩序の攪乱や維持をより強調したものであると考えられるからである。

## メディア・スポーツ・ジェンダー

### 1. ジェンダー／セクシュアリティをめぐる諸概念

#### 1) 構築主義の貢献

今日、社会科学の分野では、社会的・文化的性としてのgender概念は、生物学的性としてのsexとは区別されるものとして理解されている。ジェンダー概念の提示は、「性差」に関する後天的形成モデルの説明に重要な鍵概念であった。すなわち、ジェンダーは生物学的基盤にもとづき社会的・文化的な背景によってさまざまな形質が獲得されたものである、と理解されてきた。

J. バトラーの『ジェンダー・トラブル』における議論(Butler訳書, 1999)は、従来のセックス／ジェンダー関係を大きく変えた。バトラーは、本質的な性が人間の内部に内面化されるのではなく、異性愛主義のマトリクスが人間の身体の表面に書き込まれ、あたかもそれが内面的な本質であるかのように見せかけられている、と論じた。

構築主義的アプローチにおけるジェンダー研究において、女／男は生物学的な基盤にもとづくというよりは、当該社会において、社会的相互作用を通して、対なるカテゴリーとして構築されたものである(上野 2001)。江原は、エスノメソドロロジーと構築主義の融合を試み、日常生活からマクロレベルの社会に至るまでジェンダーが社会的に構築されていることを足がかりに、ジェンダー知の産出とジェンダー秩序＝性支配の産出の循環的な関連を論じている(江原, 2001)。

#### 2) 「異性愛主義」と「ホモソーシャル」概念

R. コンネルは、『ジェンダーと権力』において、「ヘ

ゲモニックな男性性 hegemonic masculinities」と「誇張された女性性 emphasized femininities」という対概念を提示した。「ヘゲモニックな男性性」は、女性性および別のパターンの男性性を支配し従属させる。「誇張された女性性」は、従属的な服従に関連しており、ヘゲモニックな男性性との対としての関係性により把握される。

「ヘゲモニックな男性性」と「誇張された女性性」は、対として「異性愛のマトリクス」を構成する。これは、異性愛を唯一で正しい関係性のあり方とする社会の枠組みを指す語である。なお、先述のバトラーも、社会における関係性のあり方を指す概念として「強制的異性愛」を提示している。

「異性愛主義」と関連する用語として、E. セジウィックの「ホモソーシャル」概念が挙げられる。セジウィックは、イギリス文学作品の分析を通して、イギリス社会における男のホモソーシャルな欲望を明らかにすることを試みた(Sedgwick訳書, 2001)。ホモソーシャルという語は、ホモセクシュアルと類似すると同時に区別される用語である。男のホモソーシャルな欲望(男同士の絆)は、女のホモソーシャルな欲望(女同士の絆)に比べ、非連続である。すなわち、男のホモソーシャルな欲望は、ミソジニー(女性嫌悪)と同時に、ホモフォビア(同性愛嫌悪)も有している<sup>(1)</sup>。

### 2. スポーツとメディアに関する先行研究

スポーツ社会学におけるジェンダー研究は、スポーツする主体としての女性の顕在化から始まった。そこから、男性中心主義のスポーツ界における女性の侵犯、ジェンダー秩序における女性の抵抗などに関する研究が行われた。これらの研究は、スポーツ界の男性中心主義、スポーツ主体としての女性の戦略、男性が構成する社会集団のホモソーシャルな構造<sup>(2)</sup>、などを明らかにした。

メディアに描かれたスポーツにおけるジェンダーとセクシュアリティの問題は、今世紀に入り、スポーツ研究、教育社会学等さまざまな領域の研究者によって分析が行われている。たとえば、新聞報道における女性競技者の形容にあらわれたジェンダー・イデオロギーの内容分析(飯田, 2003)、女子マネージャーの登場をめぐるメディア言説分析(高井, 2005)、競技主体としての女性をめぐる歴史社会的な言説分析(高橋ほか 2005, 谷口 2007)、などが挙げられる。

### 3. 野球マンガとジェンダー

野球というスポーツは、その誕生当初より、男性性と結びつけられてきた歴史を有する。この状況は、この競

技を輸入した日本においても同様であった。明治期における野球の導入以後の言説分析で、野球が他のスポーツとの葛藤を経験しながら次第に心身鍛練の道具としてとらえられるようになったことが明らかにされている（坂上, 2001）。また、女子野球の歴史研究においては、男性領域に対する侵犯に対する抵抗がみられたことが示唆されている（花谷・入口・太田, 1997）。野球マンガに注目しても、描かれるのは圧倒的に男性登場人物が多い<sup>3)</sup>。

描かれた女性の侵犯について、興味深い分析がある。宮沢（2004）は、卒業研究で女性選手を登場人物とする野球マンガ4作品を取り上げ、各作品における登場人物の動きや物語展開におけるジェンダー・バイアスを析出した。その結果、各作品において、女性選手に対するまなざしや設定に「女はこうあるべきだ」というジェンダー・バイアスがみられることが明らかにされた。

## 研究の視点・対象・方法

### 1. 研究の視点

野球マンガのように女性の登場が少ない設定のメディア作品のジェンダー分析では、伝統的な分析手法である登場人物のジェンダー比の検討はあまり意味を持たない。また、ジェンダー役割の分析だけでは、作品世界におけるジェンダー秩序を十分には明らかにできない。むしろ、高校野球部において女性がいかなる存在としてとらえられているか、言語および画像の解釈・分析・考察を行う必要がある。

ここで、本研究で行う、構築主義にもとづく解釈的な内容分析の考え方について述べる。

本稿では、各作品の内容分析の結果抽出される内容を、それ自体「客観的」なものとしてとらえない。すなわち、本分析自体、一定の背景を持つ筆者自身による解釈的な読みの結果、ととらえる。これは、メディア・テキストの解釈は人によって多様でありうることを踏まえている。解釈の多様性をもって、「(客観性を前提とする)分析でない」、それゆえに「社会科学的研究ではない」と断じるのは早計である。内容分析者は、客観的・価値自由ではありえず、テキストの「主観的な読み手」であることに自覚的である必要がある、ということである。

上記の考え方は、心理学における社会的構成主義や社会学における構築主義（上野, 2001）、そしてアクティヴ・インタビュー（Holstein and Gubrium訳書, 2004）の影響を受けている。とりわけアクティヴ・インタビューは、調査者（本稿では分析者）が客観的に調査対象（本稿ではマンガ作品）からデータを抽出する、という従来の社会科

学における常識を捉え直し、インタビュー（本稿では内容分析）が調査者自身の主観性や調査者と調査対象者との相互行為によって構築される、という考えに立つ。

この考え方は、調査あるいは分析の対象の選定のあり方自体、一定の問題意識に立つことを前提にしていることを示唆する。本研究においては、筆者自身の野球に対する思いやジェンダーに関する経験などは、本稿の分析対象選定、および解釈のありように影響を及ぼしうる。

### 2. 対象および方法

本研究では、現在までに単行本として刊行された野球マンガのうち、プレイヤーまたは指導者としての女性の登場が顕著である少年・成人男性向けコミックを対象に、解釈的内容分析を行った。

分析の対象とする野球マンガ作品は、2010年1月から同年3月にかけて、次の手順で入手・閲覧した。(1)野球マンガに関する先行文献を参考に、野球マンガのうち「時代を代表する作品」または「女子・女性がプレイヤーや指導者としての役割を果たしている作品」を選定した。(2)現在販売されている作品については、可能な限り購入した。現在流通していない作品についてはマンガ図書館で閲覧し、許可を得られた範囲で作品の一部の複写を入手した。

こうして入手・閲覧したマンガ作品は、29作品・シリーズであり、そのうち女性が野球選手あるいは指導者である作品は、17作品・シリーズである。これらの作品における物語の設定および登場人物の果たす役割は、さまざまであった。本研究では、各作品について、物語展開や登場人物のはたらきにおけるジェンダー秩序の読み取りを試みた。

本稿では、上記作品のうち、女性が高校野球の監督を務める設定の4作品に焦点を当てる。男子生徒が圧倒的多数を占める高校野球界にあって、女性監督は、指導者であると同時に他者でもある、と考えられるからである。対象作品は、下の表に示した通りである。

表 作品一覧

タイトル	泣き虫甲子園	エース！！	おおきく振りかぶって	最強！都立あおい坂高校野球部
作者	やまさき十三(原) あだち充(画)	佐藤和彦	ひぐちアサ	田中トモユキ
出版社	小学館	白泉社	講談社	小学館
シリーズ	サンデーコミックス	ジェッツコミックス	アフタヌーンKG	サンデーコミックス
初巻年	1977	1990	2003	2005
終巻年	1977	1991	継続中	2010
巻数	4	3	13	26
監督	園田夏子*	中嶋千鶴	百枝まりあ	菅原鈴緒
備考	ああ！青春の甲子園(全7巻)3～6巻			

## 分析結果

各作品について、筆者自身が物語の読み取りを行い、高校野球の女性監督をめぐるジェンダー表象の分析を行った。その結果は、下記の通りである。

### 1. 「例外」としての女性監督 — 『泣き虫甲子園』の園田夏子

『泣き虫甲子園』の主人公・園田夏子は、城北高校の生徒である。父親は、野球部監督であり、指導に熱心である。夏子は、父親が野球指導に熱心なあまり家庭を顧みず母親の死にも居合わせなかったことを恨み、「野球嫌い」である。しかし、野球部とのかかわりを通して、次第に父親の心情を理解するようになる。そして、病に倒れた父親の身代わりとして監督を務める。

夏の甲子園予選準決勝、城北高校は、監督が病気で球場入りできないため、試合開始が遅れていた。その時、夏子は、ユニフォームを着て現れる。審判員は「女子高校生の監督なんて聞いたことがない」と夏子のベンチ入りを認めまいとするが、夏子やエースの旭は、「監督の性別に関する規定がない」ことを理由にベンチ入りを認めさせようとする。旭がベンチへの呼びかけでナインの同意を誘示し、審判たちはしぶしぶ「特別の事情」として、夏子の監督としてのベンチ入りを認める（図1）。試合が始まると、夏子は的を射た采配をする。その結果、チームは勝利を収める。しかし、父親は亡くなってしまう。決勝戦の日も、夏子は、父親そして監督の死を伏せてベンチ入りし、試合に臨む。チームで夏子以外に唯一監督の死を知る旭は、力を振り絞ってチームを勝利に導く。

この物語では、当初は「野球嫌い」であった夏子が、物語のクライマックスにおいて「冷静沈着」な監督としてふるまうようになる。ただし、「園田夏子監督」は、病に倒れた父の緊急的な「代理」であることによって認められたものであり、その存在はあくまでも「例外」である<sup>(4)</sup>。

### 2. 女性指導者の拒絶への対抗

本稿で考察の対象とした1990年代以降に刊行された各作品に登場する女性は、正式に高校野球部の監督である<sup>(5)</sup>。これらの作品においては、物語の冒頭、女性が指導者であることに対する抵抗が示されることがある。これらに対し、女性監督たちは、自らの有能さや力を彼らに誇示することで抵抗する。

#### 1) 練習試合での勝負 — 『エース!!』の中嶋千鶴

『エース!!』の主人公・中嶋千鶴は、ある有名な元プロ野球選手で現監督の父親を持つ。父親の知人の紹介で、高校の野球部監督に就任する。野球部は「不良」の集まりであり、部員たちは真面目に練習をしない。実力はあるが練習に素直に取り組めないでいるエースの桜間は、「女が監督をする」ことが許せず、中嶋に会うやいなや彼女を拒絶する。

桜間は、中嶋に、レギュラー組と1年生が対戦する紅白戦を提案し、中嶋率いる1年生チームが負ければ彼女に監督をやめるよう迫る。中嶋は、彼の提案を受ける。中嶋は、実力の低い1年生選手たちを巧みに起用し、勝利まで後一步に迫る。試合に負けたため中嶋は学校を去ろうとするが、桜間たちレギュラー組は、彼女が指導者になることを認め、忘れものは「チームメイト」だ、と彼女を引き留める。

#### 2) ノックの技術と腕力 — 『おおきく振りかぶって』の百枝まりあ

『おおきく振りかぶって』は、埼玉県立西浦高校野球部を舞台にする。百枝まりあは、新規発足した<sup>(6)</sup>硬式野球部の監督である。

百枝の正体は、第1巻の冒頭部分で卒業生であることが監督の志賀によって明らかにされており、バイト代をすべて野球部のために使うなどかなりの野球熱心な女性であるという描写がみられるが、当初彼女のことはほとんど明らかにされない。物語が進むに従い、百枝が23歳であること、在校中は軟式野球部のマネージャーであったこと、彼女が中心となって硬式野球部に変えようとした結果野球部の先輩たちとのつながりがなくなってしまったこと、などが明らかにされていく。

春の入学式の日、硬式野球部の入部希望者が集まる場面で、新入生で入部希望者のひとり花井は、監督が「女」であることに抵抗を感じ、「女が監督だから」と入部をやめようとする。

百枝は、バットでボールを「リフティング」してみせ、立ち去ろうとした花井の注意を自分に向ける。その直後、彼女は垂直に高くキャッチャーへのノックを打ち上げてみせ、ノック技術の高さを誇示する（図2）。



図1 例外として認められる「女性監督」  
（『泣き虫甲子園』第3巻，pp.174-177）



図2 監督のノック技術と新入部員の困惑  
（『おおきく振りかぶって』第1巻，pp.8-9）



図3 容姿に言及される女性監督  
 (『最強! 都立あおい坂高校野球部』第2巻, p.116)

その後、百枝は、その場にあった甘夏を両手にひとつずつ持って握りつぶし、絞り出されたジュースをコップに受け、ノック技術に戸惑う花井に飲ませる。花井は「女って・・・女って・・・」と震えながらジュースを飲む。ここに、百枝の「女性性」と「ノック技術」「腕力」のギャップを目の前にした、花井の混乱が描写されている。

その後、百枝は、連休中に合宿と練習試合を計画し、メンタル・トレーニングを積極的に活用した指導を行う。また、選手の個性を的確に把握し、適切なはたらきかけを行う。部員たちは、彼女を「モモカン」と呼び、時として腕力をふるう彼女の厳しさにおそれをなしつつも、彼女の指導を受け入れる。夏の大会終了後、百枝は選手たちに目標設定を行わせる。彼女は、部員たちを「甲子園優勝」という目標設定に導き、特訓を課す。

### 3) 指導力 — 『最強! 都立あおい坂高校野球部』の菅原鈴緒

『最強! 都立あおい坂高校野球部』に登場する菅原鈴緒は、大学まで硬式野球部に在籍し、大学ではリーグ戦に出場し「マドンナ」として注目された経歴を持つ。自らかなわなかった甲子園に出場するという夢を実現しようと教師になり、都立あおい坂高校(「あお高」)で野球部の監督となった。しかし、進学に力を入れる学校であ

るため教職員の理解を得られず、厳しい練習を課したために部員のほとんどに逃げられてしまう。

1年後、菅原のいここにあたる主人公の北大路輝太郎をはじめ、少年野球チーム「ボマーズ」の教え子6人が、彼女を助けるために「あお高」に入学する。野球部に残った3名と合わせ9名だけのチームで再出発したチームは、菅原の的確な指導によって力をつける。

夏の甲子園大会予選で、菅原は、巧みな采配と選手掌握術により、単なる「アイドル」としてしか見ていなかった相手チームの指導者や選手たちを見返す。チームは怪我人続出で苦戦するが甲子園出場を果たし、最後には甲子園優勝を成し遂げる。

#### 4) 「仲間入り」を果たそうとする「他者」

上記3作品の女性監督たちは、いずれも当初は周囲や部員たちの拒絶や抵抗にあう。しかし、彼女たちは、野球の技術や指導力により拒絶に立ち向かい、部員たちの信頼を得ることで、地位を確立していった。

ここから、二点を指摘できる。第一に、彼女たちは、チーム内部からも抵抗を受けるほど、野球部においては「他者」である。第二に、しかしながら、彼女たちは、自身の力量によって自分の存在を認めさせることではじめて部への「仲間入り」を許された存在である。

### 3. 「女性性」への焦点化と誇張

一方、女性監督たちは、「女」であることにより、周囲の男性たちからの「好奇」のまなざしを受ける存在でもあった。肉体の一部を強調する描画、男性登場人物による発言、といったさまざまな仕方で、彼女たちは「女性性」を表現する存在＝「見られる客体」として構築される。以下、具体的に例を挙げて述べる。

#### 1) 「見られる対象」としての女性

菅原鈴緒は、しばしば、対戦校の選手や指導者など男性たちによって、容姿に言及されていた。

図3は、「あお高」の試合を視察する強豪校の選手たちによる会話の場面の1ページである。このページ最初のコマには、菅原が腕をひろげて立っている姿が大きく描かれている。それは選手たちの視線からの菅原の姿であり、彼女が美貌と豊胸に注目されていることを示唆する。

彼女の姿を描いたコマには、のちに「あお高」と対戦することになる強豪校の選手たちの会話がかぶせられている。この会話において、彼らは、少年野球チームの名選手たちが都立高校に集まったのはきっと彼女への性的興味からである、と揶揄し、性行為を連想させるような表現で、彼女に「しごかれない」「(甲子園に)何度でも連れてってあげたい」と語っている。



図4 監督を見るのをためらう相手選手  
(『おおきく振りかぶって』第6巻, p.21)

## 2) 「女性」身体への焦点化

百枝まりあは、部員たちから厳しい指導者として畏敬されている。それでも、彼女の容姿はしばしば注目される。たとえば、部員の田島は、家からの差し入れであるすいかを胸に入れて、「モモカーン！」と叫ぶ。また、彼女を取材する女性新聞記者は、百枝を見た時、その美貌と豊胸が目に入る<sup>(7)</sup>。

図4には、夏の大会初戦における強豪校・桐青高校との試合中の一場面を示した。この試合で、西浦高校は最終的に桐青高校に勝利する。桐青の捕手兼主将・河合は、試合中に、部結成間もないチームをうまくまとめている西浦高校監督・百枝の力量に感心しつつ、ベンチにいる彼女の動きを確認しようとする。その時、彼は、ベンチで腕組みをして立っている百枝の豊胸が目に入ってしまう、「なんか見ちゃイケナイような気が・・・」と一瞬目をそらしてしまう。しかし相手監督を見るのが自分の仕事だ、と思い直し、再び百枝の方をじっと見ようとする<sup>(8)</sup>。

百枝が「女性」であるという特殊性は、部員たちよりは外部の者によって言及される。たとえば、学校の応援団長を務める浜田は、クラスマッチの休憩時間に、勝ち進む西浦高野球部は取材の対象となるであろうこと、マ

スコミはまず監督の経歴やバストなどに興味本位で注目するのではないかと同じクラスの3人の部員に話ろうとする<sup>(9)</sup>。

## 3) 「部外者」の視線

本稿で分析対象とした女性監督のうち、とりわけ菅原と百枝については、身体が強調されることにより彼女たちの「女性性」が強調されていた。先述のように、彼女たちは、監督としての技量を示すことによって、男性的集団である野球部への参入が認められている。その一方で、彼女たちは、身体においては、常に「女性」として見られる「客体」であり続ける。

そのまなざしは、とりわけ当人および当人の所属する集団の外部にいる者のものとして描かれる。対戦相手の指導者・選手や校内の応援団長は、いずれも、彼女たちが指導するチームの外部に属する「部外者」である。また、この描写は、作品内部の「部外者」とどまらず、作品の「外部」の存在、すなわち、潜在的な読者による彼女たちへの予想されるまなざしをも描いている、とも解釈することもできるだろう。

## 考察

以下では、ここまでの解釈的内容分析での記述内容を踏まえ、現時点での考察を行う。なお、下記の考察は、あくまでも筆者自身による解釈結果にもとづくものである。

### 1. ホモソーシャルな社会集団としての高校野球部

本稿でとりあげた高校野球部の女性監督たちは、部員や入部希望者によっても拒絶される。『泣き虫甲子園』の園田夏子は、部員に認められて監督になったとはいえ、それはあくまでも、正式な監督である父親の緊急的な代理であるゆえである。正式な指導者として描かれる3作品の女性たちは、外部の者ばかりではなく、部員たちによっても、拒絶反応や好奇のまなざしを受けていた。また、『エース!!』の中嶋千鶴は、エースの桜間からの強い拒絶反応にあった。そして、『最強! 都立あおい坂高校野球部』の菅原鈴緒は、着任直後にもともといた部員に逃げられてしまった。『おおきく振りかぶって』の百枝まりあもまた、当初は入部希望者に「拒絶」された。

女性監督たちは、その力量によって部員たちの承認をかちとる。しかし、たとえば図3および図4に示した菅原や百枝の例のように、存在が認められた後もなお、第三者によって「見る対象」としての「女性」として構築される。彼女たちは、いくらかの「好奇の視線」を浴びる。

少なくとも、本稿で分析を行った作品において、「一人前の存在」としての女性の侵入がなかなか困難である高校野球部は、ある意味で「ホモソーシャル」な社会集団であると考えられる。高校野球を舞台に描かれる各作品の物語世界は、今なお「男の世界」であり、「ヘゲモニックな男性性」を支配的な原理とする。この「男の世界」にあって、女たちは、ヘテロセクシュアルな欲望の対象である。

したがって、たとえ指導者であっても、高校野球部、あるいは野球の世界において、女性は「残余カテゴリー」であり、「消費の対象」であり、潜在的な「異性愛の対象」である。それゆえ、女性監督には、部員や第三者によって承認されるためにはいくつもの困難が伴う。たとえば努力の結果彼らにその存在が認められたとしても、彼女たちにおける、潜在的な「異性愛の対象」としての女性、という表象は、維持・存続される。

## 2. ジェンダーにもとづく権力関係への抵抗

一方、中嶋千鶴、菅原鈴緒、百枝まりあは、あるいは園田夏子も、それぞれの仕方、女を一人前に扱おうとしない、ホモソーシャルな野球部における排除に抵抗していた、と考えられる。

中嶋、菅原、百枝は、ともに硬軟織り交ぜた人心掌握術を駆使して部員たちを統率し、チームを巧みに指揮していた。それにより彼女たちは、部員たちを心服させ（中嶋、百枝）、対戦相手を驚かせた（中嶋、菅原、百枝）。園田夏子もまた、単なる父親の代理以上に、野球の采配を積極的に行った。

彼女たちが「男の世界」である「高校野球」で監督として指揮をすることには、「(常識的に考えれば)女が野球なんて(するものではない)」という、ジェンダー秩序に根ざした支配的な言説への挑戦である。それは、ホモソーシャルな高校野球部における欲望のありように、小さいながらも風穴を開けようとするものかもしれない。

## 3. ジェンダー秩序の維持／攪乱

中嶋、百枝、菅原の存在は、一見、「ジェンダー」の境界線を越境している、と解釈することもできるだろう。3人の監督たちは、ほぼ男子選手のみで構成される高校野球部の指導者である点において、「男性の世界」に入り込み、しかも男子選手たちを指導する立場である、という二重の意味でジェンダーを越境していると考えられる。

彼女たちは、「女」であるがゆえに、はじめて出会う人たちからの「好奇」のまなざしに「半人前」扱われ続けるが、男性プレイヤーあるいは生徒たちよりも

優れた能力を有していることによってはじめて、部員たちによるフィールドに立つことの承認を受けた。彼女たちはジェンダー秩序に挑戦し、それを克服した、と解釈することもできるだろう。

しかし、見方を変えれば、野球において男をも凌駕する存在でなければ、彼女たちの存在は認められなかった、とも読み取れる。ここに、ジェンダー秩序の遍在、およびその根の深さを読み取ることができる。

したがって、本稿でとりあげた監督に限らず、野球マンガに登場する「野球をする女性たち」についてジェンダーの視点あるいはフェミニストの視点より分析・考察する際には、複眼的な視点が求められる。「女が男を凌駕する」という特別な状況に目を配るとともに、たえず「半人前」として見られ続ける「女」カテゴリーが維持され続けていることにも注意する必要がある。

しかし、社会に遍在するジェンダー秩序は、まったく強固で変更不可能なものであろうか。江原（前掲書）は、「フラクタル構造」という語を用い、社会のあらゆる部分において繰り返し同型のジェンダー秩序すなわち性支配が再生産されると説明した。しかし、バトラー（前掲書）が論じたように、二分法的なジェンダーのありようから逸脱した行為は、強固なジェンダーの二分法を揺さぶり攪乱する可能性を潜在的に持っていると考えられる。

スポーツの世界に徐々に女性選手が侵入してきたように、野球界においても女性選手や高校野球の女性指導者が登場した。フィクションである野球マンガの世界における異なるジェンダー・ディスコースの浸透は、その状況とは無関係ではないだろう。背景には、長年にわたり「男子の技」としての地位を確立してきた野球の世界、あるいは野球マンガの世界における既存の価値が揺らいでいることが考えられる<sup>(10)</sup>。

したがって、野球マンガにおける、一般的に考えられる設定における女性野球人——すなわち指導者や選手たち——の登場は、野球をめぐる新たな言説構築の可能性を示唆しているといえよう。果たして、「異質」な存在である彼女たちの存在は、既存の秩序をいかに揺さぶるか。その攪乱的な企みをめぐる種々の言説を明らかにすることが、今後の課題である。

## 謝辞

本研究は、平成21年度～23年度科学研究費『メディアに描かれたスポーツにおけるジェンダー・セクシュアリティおよびその解釈』（基盤研究（C）、課題番号21510298）の研究成果である。本研究の遂行にあたり、

京都国際マンガミュージアム、現代マンガ図書館 内記コレクション、米沢嘉博記念図書館（50音順）で資料閲覧を行った。関係者の皆様には心より御礼申し上げます。

## 注

- (1) これに対し、女のホモソーシャルな欲望は、必ずしも「ホモセクシュアル」とは真っ向から対立するとは限らない。
- (2) たとえば、水野（2007）によるサーファー・コミュニティのエスノグラフィーは、サーファー・コミュニティのホモソーシャルな構造と女性の抵抗を析出した。
- (3) 米沢（2002）による野球マンガ評論においては、女性マンガ家による作品群についても言及はみられる。しかし、分析されたマンガ作品のうち、プレイヤーや指導者として女性が登場する作品は、一部にとどまる。
- (4) 女性監督が認められない描写もみられる。本稿での考察の対象外だが、1988年に出版された野沢尚原作、斉藤むねお画『ヒューマン・リーグ』（全2巻、小学館サンデーコミックス）には、女子高生監督の小春が、県大会予選の日に役員に呼び止められ、女子は監督として認められない、と言われ悔しがらる場面が描かれている。
- (5) ただし、正式に男子の高校硬式野球部の監督に女性が就任する事例は、2000年には、千葉県の公立高校野球部監督に女性が就任したのが最初である（2002年に1勝している）。2010年現在、高校硬式野球部の女性監督は1名である。
- (6) 正確には、もともとあった軟式野球部がいったん廃部になり、入学式のあった年の前年度に硬式野球部が発足した。
- (7) ここで、女性記者が百枝の「女性」身体に注目していることは興味深い。百枝は、同じ性別カテゴリーにある記者にとっても「他者」である、と考えられる。あるいは、記者が、百枝の身体特徴を「女性」身体として解釈することを当然視している、とも考えられる。
- (8) しかしその時には、すでに百枝よりサインが出された後であり、結局彼は自らの投球の組み立ての手がかりとなる情報を見逃してしまう。
- (9) ただし、部員たちは浜田の話の聞かずに、休憩を終えてしまう（第9巻、pp.40-41）。
- (10) たとえば、高井（2005）は、高校野球の女子マネージャーのベンチ入りが認められるようになったのは皮肉にも当時ファン層を拡大しつつあったサッカーへの対抗であった、と新聞記事のコメントを示しつつ述べている。

## 参考文献

- Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge (=1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル ―フェミニズムとアイデンティティの攪乱―』青土社)。
- Connell, R. W., 1987, *Gender and Power, Polity Press* (=1993, 森重雄, 菊地栄治, 加藤隆雄, 越智康詞訳『ジェンダーと権力 ―セクシュアリティの社会学―』三交社)。
- 江原由美子, 2001, 『ジェンダー秩序』勁草書房。
- 藤田由美子, 2009, 「『子どもとメディア』研究の課題と展望」『子ども社会研究』15, pp.96-103。
- 藤田由美子, 2010, 「スポーツマンガとジェンダー ―野球マンガの中の女たち―」日本子ども社会学会第17回大会(京都女子大学), 当日発表資料。
- 花谷健次, 入口豊, 太田順康, 1997, 「女子『野球』に関する史的考察(Ⅱ) ―日本女子野球史―」『大阪教育大学紀要 IV 教育科学』45(2), pp.289-302。
- Holstein, James A. and Gubrium, Jaber F., 1995, *The Active Interview*, Sage Publication (=2004, 山田富秋, 兼子一, 倉石一郎, 矢原隆行訳『アクティブ・インタビュー ―相互行為としての社会調査―』せりか書房)。
- 飯田貴子, 2003, 「新聞報道における女性競技者のジェンダー化 ―菅原教子から植崎教子へ―」『スポーツとジェンダー研究』1, pp.4-14。
- 宮沢千春, 2004, 「スポーツマンガに潜むジェンダー・バイアス ―女性選手を登場人物とする野球マンガの分析を通じて(特集 愛知学泉大学コミュニティ政策学部 平成15年度 卒業論文(選抜))」『コミュニティ』(愛知学泉大学コミュニティ政策研究所) 7, pp.129-149。
- 水野英莉, 2007, 『サーフィンとスポーツ体験のエスノグラフィー ―ジェンダー・ローカリティ・コミュニティ』京都大学 博士論文。
- 坂上康博, 2001, 『につぼん野球の系譜学』青弓社。
- Sedgwick, Eve K. 1985, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, Columbia University Press (=2001, 上原早苗, 亀澤美由紀訳『男同士の絆 ―イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会)。
- 高橋一郎, 萩原美代子, 谷口雅子, 掛水通子, 角田聡美, 2005, 『ブルマーの社会史 ―女子体育へのまなざし―』青弓社。
- 高井昌吏, 2005, 『女子マネージャーの誕生とメディア

『スポーツ文化におけるジェンダー形成』ミネルヴァ書房。

谷口雅子, 2007, 『スポーツする身体とジェンダー』青弓社。

上野千鶴子編, 2001, 『構築主義とは何か』勁草書房。

米沢嘉博, 2002, 『戦後野球マンガ史 一手塚治虫のいない風景』平凡社新書。